

英語コミュニケーションの要領

— 英語会話のコツ —

柏瀬省五

1. はじめに コミュニケーションについて

人が言葉を使う目的は、大きく分けて、(1) 自分の周りの事実や状況を説明する、(2) 自分の心の中の気持ちや意見を表明する、(3) 複数の人の間で情報や行為や指示を与えたり、求めたり、受け取ったりすることである。一般的に言って、人の会話は、これら三つの目的を適当に組み合わせて行われる。もちろん、場繋ぎ、時間つぶし、フラストレーションの解消も、会話の目的に含めることができる。

さて、コミュニケーションは、複数の人が、いろいろな手段を用いて、互いに自分の意図を他人に伝達しあう活動である。いろいろな手段のうち、言語は、コミュニケーションの手段として極めて有力な手段の一つである。この小論は、言語、特に英語を使って効果的なコミュニケーションをとる場合の要領について論じる。

理想的なコミュニケーションは、発信者の意図が受信者に過不足なく正確に伝わることである。しかし、現実には、発信者の意図が、受信者に過不足なく正確に伝わることは極めて稀で、必ず受信者の側に誤解や理解にズレが生じる。その原因は、コミュニケーションの原理に根ざすもの、発信者や受信者の不注意によるものなどさまざまである。しかし、いずれにしても、コミュニケーション活動は、発信者の意図が受信者に正確に伝わるのが重要である。コミュニケーション活動は、この発信者と受信者の間に生ずる誤解や理解のズレを少しでも減らす工夫と努力の連続である。

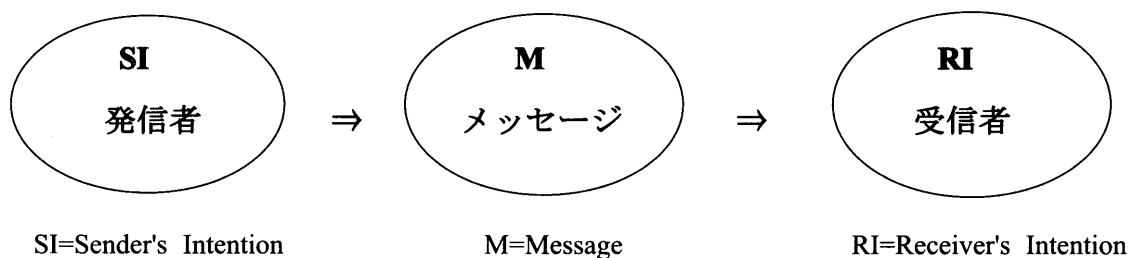
2. 英語コミュニケーションについて

(1) 英語コミュニケーション活動の原理

英語コミュニケーション活動は、何らかの状況の下で、何らかの意図を持った発信者が、

英語のメッセージを作り、そのメッセージを受信者に向けて発信する。受信者は、何らかの状況の下で、受信者なりの意図をもって、受け取った英語のメッセージを、受信者として了解する。この発信者と受信者の両方の活動を英語コミュニケーション活動と呼ぶ。通常は、この発信者と受信者の役割は、コミュニケーション活動に参加する者の中で、互いに交換しながら、連続的に繰り返して実行される。すなわち、英語会話では話し手と聞き手は順次に交代しながら会話が展開させる。図で示すと下記のようになる。

コミュニケーションの概念



(2) 英語コミュニケーションの失敗とその原因

英語のメッセージを送った発信者の意図が、受信者に正確に伝わらない、すなわち、英語コミュニケーションが失敗に終わる場合は、大きく分けて、次の3つの領域で発生する。第一は、発信者、第二は、受信者、第三は、媒体の英語。英語コミュニケーションは、これら三つの要素が構造化して互に関連しあって実現する。従って、これらのどこかでトラブルが発生しても、全体として、コミュニケーションは失敗に終わる。

(3) 発信者が考慮すべきこと

例えば、発信者が交通事故に遭遇して、瀕死の状態にありながら、家族に事故のことを伝えようとしたとしよう。現実には手段をいろいろ工夫したとしても、自分で家族に伝えるのは不可能であろう。仮に、怪我が軽傷で、自由に話もできる状況にあったとしても、周囲にメッセージを送る手段、例えば、電話機や本人に代わって連絡を取ってくれる人がいない場合、やはり、その被害者は、家族に連絡を取ることができない。仮に、電話機が使える状態にあったとしても、周囲が余りにも混乱していて騒々しく、いくら大きな声をだしても、周囲の騒音にかき消される場合、やはり、コミュニケーションは成立しそうにない。いずれにしても、発信者がメッセージを送るためには、発信者のコミュニケーショ

ン活動を保障する一定の状況が必要である。しかし、実際のコミュニケーション活動では、いつでも理想的な状況や環境が保障されているとは限らない。通常は、発信者は、さまざまな困難な状況と環境で、いろいろな咄嗟の思いつきと工夫によって、メッセージを送る活動をせざるをえない。例えば、気が滅入っているときでも、元気を奪いたたせて、大声で話すとか、急いでいれば、ある程度の誤解を承知で早口でしゃべるとか、とにかく、自分の置かれている状況と環境がどのようなものであるか一瞬に判断して、置かれている状況と環境の中で、比較的よい手段や方法を選択して、あるいは、工夫して創り出す努力と知恵を働かせている。

(4) メッセージの内容

例えば、「カボチャで黄金の馬車を作って欲しい」とか「地球の反対側にいる恋人に1分以内に来て欲しい」と要望しても、このような奇想天外な内容は、受信者には、すぐには了解されない。また、このような要望は、通常の場合では、実現されない。つまり、メッセージの内容は、通常、常識離れしたものであってはならない。相手と情報を共有するに相応しい内容でなければ、相手に了解されない。発信者が送ろうとする内容は、発信者の常識の範囲内であることはもちろんであるが、受け取る受信者の側から見ても、常識の範囲内でなければコミュニケーションの成立はおぼつかない。したがって、発信者は、発信者が置かれている状況や意図の性質と共に、受信者が置かれている状況や意図に関する知識も予め持っていることが極めて重要になる。互いに知らない初対面の人同士の会話がしばしば頓珍漢な遣り取りになったり、また、互いに相手のことを知り尽くしている親密な間柄の会話が、簡潔で省略が多いのは、このことを物語っている。

例えば、"How old is your wife?" (あなたの奥さんは何歳ですか) の質問を、まだ、結婚していない相手に尋ねたら、相手はいったいなんのこをを聞かれているのだろうと戸惑うだろう。また、同じ質問を、通常は女性の年齢については聞かない社会習慣にある相手に尋ねたら、たとえ相手が結婚していたとしても、社会的には適切な質問とは思われない。少なくとも受信者には好感を持って受け入れられない。ただし、同じ質問を、何か事件の調査が必要があって、その事件の調査官が関係者の夫に、事件との関連において、妻の年齢を尋ねたとしたら、この場合は、年齢を尋ねることは、全く当然のことで、問題はないであろう。このように発信者の意図は、発信者が置かれている状況・意図、受信者が置かれている状況・意図と密接に関連しあっていて、メッセージは、受信者が直ぐに理解

できる程度に常識的でなければならない。コミュニケーション活動は、発信者と受信者の状況と意図を常に配慮しながら、互いに理解しあえる常識的範囲内のメッセージを遣り取りする活動なのである。

(5) 受信者の質に合わせたメッセージ

コミュニケーションに参加する発信者は、送りたい意図を、通常一定のコード、あるいは互いに了解されているルール、あるいは何らかの形式、例えば、言語とか、身振りとか、顔の表情等を利用して、メッセージを作り、それを受信者に送る。受信者は、送られてきたメッセージを、通常は、発信者が使っていたのと同じコード、ルール、形式を利用して、発信者の意図を復元して、解読する。受信者は、発信者の意図を、受信者の常識に照らして、受信者の立場で納得する。従って、メッセージは、受信者の常識の範囲内で作っておくことが、受信者に理解されるためには、極めて重要なことになる。従って、発信者は、受信者の状況や環境に関する知識と共に、受信者のメッセージを受け取る意図についても、予め発信時に予備知識として知っていることが望ましい。しかし、これは、可能な限りであって、相手の意図がわからなければ、メッセージを送ることができないという意味ではない。相手の人柄や日頃からの考え方やメッセージを受け取るであろう時点での相手の受け取り方の態度の予測がつけば、それに応じて、効果的なメッセージを作ることができるであろう。

メッセージは、言語を利用する他、身振り、顔の表情等をコード化しても作る。通常、人間が使える、跳ぶ、跳ねる、走る、歩く、物を運ぶ、叩く、撫でる、抱きしめる、押す、引くなどのすべての行動、また、見る、聞く、嗅ぐ、味わう、触る等のすべての知覚、あるいは、笑う、泣く、顔を歪める等の表情、腕を組む、足を組む、手をあげる、身体を傾ける等のポーズ等、なんでもコード化してメッセージを作ることができる。とりわけ言語行動は、人間がコミュニケーション専用に発達させた行動で、「メッセージの容器」、「メッセージの運搬者」と言える。言語は、意思の伝達のために高度化した便利な道具である。英語コミュニケーションは、メッセージを英語で構成する。メッセージが英語で伝達される。メッセージが英語に込められる。したがって当然、英語の音声的、文法的、語彙的、慣用的特質を活用する。したがって、英語でコミュニケーションを成功させる場合には、当然、英語の特質をよく心得て活用すべきである。

例えば、発信者がメッセージを極めて明瞭な言語で、美しい声に乗せて送ったとしても、

受信者の聴覚に障害がある場合、このメッセージは、受信者には通常の方法では了解されない。どんなに名文を書き連ねたラブレターでも、文字が読めない相手には、無意味である。医学上の大発見の説明も、医学の知識を全く持ち合わせていない相手には、理解できない。発信者としては、どんなに優しい言葉を送っても、受信者が発信者を全く信頼していなければ、その言葉は素直には受信者には受け入れられない。このような状況では、コミュニケーションの成功はおぼつかない。言い換えれば、コミュニケーションが首尾よく成功するためには、発信者の側がメッセージを送る状況が良好で、意図が健全で、メッセージが明瞭にできている他に、受信者の側においても、送られてきたメッセージを理解する状況が良好であること、すなわち、受信者が発信者の意図を理解し、送られてきたメッセージを過不足なく正確に理解できるだけの環境と受信者の受信能力が整っていなければならない。

実際の会話の遣り取りを観察して見ると、発信者が、自分の主張のみにあまりにも熱心なあまり、受信者のメッセージを受け取る状況や意図をまったく無視して、自分勝手に発信している例をよく見かける。また、受信者の側では、発信者のメッセージを送る状況、意図などをまったく無視して、受信者の独善と偏見で了解している例を見かける。コミュニケーションが成功するためには、相手が自分のメッセージを理解できる状況や環境、相手が自分の意図を理解する能力と気持ちがあるかどうかについても確かめる用心が肝要である。

3. 会話の要領について

(1) 言葉を使いこなす能力

次に、会話を通して有効なコミュニケーションをする場合の要領について論じよう。そもそも、言語を使ってコミュニケーションを成功させるためには、言語の知識を使いこなす能力が重要である。例えば、英語のコミュニケーションの場合、英語の発音の知識・その知識を使いこなす能力、文法の知識・その知識を使いこなす能力、語彙の知識・その知識を使いこなす能力、慣用語の知識・その知識を使いこなす能力、それに、文の展開の知識・その知識を使いこなす能力等が必要である。また、英語を使いこなすためには、英語を聞く、話す、読む、書くなどの四技能をバランスよく使いこなせる力が必要である。しかし、これらの言語的知識・能力をしっかり身に付けていても、英語コミュニケーションが理想的にできる保障はない。例えば、人前では使ってはならないタブー語、社会的な常識や習慣に関する知識も大切であるが、それと共に、会話というものは、いつ、どのよう

に、展開されるか、また、話題は、どのようなタイミングで提出し、どのようなきっかけで展開させるかの知識と技能も大切である。また、聞き手を了解に導く言語外の技能も心得ておく必要がある。それらの技能に欠陥があれば、頓珍漢な会話が生まれてしまう。

(2) 相手の状況や意図や能力に合わせて発話する

言語によるコミュニケーション活動について、参加者は、自分と相手の状況や環境をわきまえて会話を始めることが、コミュニケーションを成功させる上で、極めて重要であることは既に述べたが、このことについてもう少し説明を加えたい。例えば、あるメッセージを送る場合、それが、形式ばった儀式での発言か、砕けた友達同士での発言かを区別しなければならない。これに失敗すれば、発話者は、変なヤツと周囲から見られることになる。友達間の砕けた会話と、学校のレポートにするインタビューと、コミュニティで問題解決のための会議での発言とは、それぞれの発言の仕方、方法が異なる。発話者は常に状況や環境や意図や自分のメッセージを作成する能力や相手のメッセージを理解する能力をわきまえた発話をすべきである。

(3) 会話の展開をコントロールする

英語でコミュニケーションを成功させるためには、一般的な言語の知識、能力、会話が行われる状況の判断、自分が置かれている状況の判断が必要であるが、具体的には、会話の目的、会話の中での自分の期待される役割、会話が行われる状況や意味等、発話者は、さまざまな観点から、展開される会話をコントロールする必要がある。以下、英語コミュニケーションの要領として、具体的な英語会話に則して説明する。

実例1 相手の意図を既に知った上で発話する

コミュニケーションとしての会話は、通常、発話者が、自分の意図を聞き手に伝える目的で行う。例えば、あるパーティで出会った男女二人が、互いに意気投合して、仲良くなる目的で会話が交わされる例を観察して見よう。発信者は受信者と同じパーティに同席していて、相手の存在に気づき、相手に近づきたいと思い、相手と交際したいと思い、そこで、相手に近づき、相手に話しかける。相手もそのことにすぐ気づき、その意図を理解して、会話が始まったとする。聞き手の側にも、話しかける側と同じ意図があり、親密になって、付き合いを始めたいという願望を持っているという設定である。発信者と受信者は、

交互にその役割を交換しながら会話を展開させるが、同一の状況の下で、同一の意図を共有しているので、会話は極めてシンプルに展開される。

女 You're very quiet. (あなた、大人しいのね)

男 I'm alright. (僕なら大丈夫だよ)

女 You don't seem to be enjoying yourself. (あんまり楽しそうに見えないけど)

男 I'm not a party person. (僕はパーティは好きじゃないんだ)

女 Neither am I really. (本当を言うと私も好きじゃないの)

男 I like to get to know people one at a time. (一度には一人の人と知り合いに
なりたいものだよ)

女 Why don't we go outside then? (じゃ、外にでない)

男 Alright. (いいよ)

この会話は、オーストラリアにおけるバーベキューパーティで交わされた「上手い会話」の例である。オーストラリア人の間でよく見かける、女から男に話しかける「誘いの常套会話」として典型的な例である。

ここで、二人はこのパーティ会場から消える。この会話の「上手い」ところは、二人とも、ダイレクトには言わないが、結局は、互いに自分の意図を無駄なく実現しているところにある。これが、成熟した大人の会話であろう。互いに相手の意図を理解していれば、多くの言葉を労する必要はない。

この男女の会話では、発話者が実にバランスよく、うまい具合に交互に発話の遣り取りをしている。しかし、この遣り取りには、疑問文とその返答といった連続性はない。文の形式から見れば、一見ばらばらな形式の文の羅列に見える。しかし、女が男に近づいて誘う。男は、女の意図を心得て、うまい具合に応じる。そして、その誘いに上手に乗る。意気投合する。この展開の呼吸が見事である。話し手も聞き手も、十分に二人の状況と相手の意図を見抜いた「上手い会話」の例である。

実例2 無意味な意図で展開された会話

次の遣り取りは、ある果物店で、客と店主の間で交わされたものである。状況をわきまえないナンセンスで「無駄な言葉の遣り取り」の例である。日本人の間の英語会話にこの

ような例をよく見かける。

客 Can I buy apples? (りんごいただけますか)

店主 Yes, you can. How many do you want? (ええ、いいですよ、何個ですか)

客 Three, please. (三個、お願いします)

英文として、間違いとか悪いというわけではないが、言葉の遣り取りとして、ナンセンスである。この会話の出だしの部分が実にナンセンスであることに気づかねばならない。なぜなら、果物店でりんごを目の前にして "Can I buy apples?" (りんごをいただけますか) は、訊く必要のない言葉である。果物店でりんごを売るのは当たり前。訊くまでもない。客である発話者が、発話される状況を言葉に反映していない例である。従って、店主の方も、その返答である "Yes, you can." (ええ りんごを売ります) も無駄そのものである。果物店でこんな無意味な遣り取りは、現実には、常識ある大人の世界では起こらない。無駄を通り越えて、「ばかばかしい会話」なのである。このような無意味な会話例を日本の英会話学習書の中にしばしば見かける。だから、そこで学習した「優秀な日本人」がこのような「ナンセンスな会話」を平気で始める。困った問題である。このような英会話は、状況を判断すれば、無駄でナンセンスな会話であることを知らなければならない。

実例3 意図が屈折している発話

次にある夫婦の会話を見てみよう。長年連れ添った夫婦の妻が、ある日、離婚を決意して、夫に切り出す会話である。夫は、直ぐにその意図を読み取って応じる。

妻 But I thought we were happy. (でも、幸せだなんて、私、勘違いだったのよね)

夫 I did too. (僕もだ)

この会話では、まず、妻から「離婚したい」という願望、すなわち意図を「結婚は間違っていた」という「表現」で切り出した。夫は妻の意図、すなわち願望を即座に理解する。それは、夫も今までの結婚生活に違和感を感じていて、思い当たる体験に裏打ちされて、「妻が離婚を希望している」という意図を即座に了解する。そして、自分の方からも「離婚したい」というメッセージを "I did too." (僕もだ) に載せて即座に返す。これも発話の状況と意図を互いが了解した上での会話だ。実に簡単な言葉の遣り取りだけで、相手の意

図が了解され、コミュニケーションが成立し、結婚が解消された例である。

意図をどのように表現したら、相手を了解させることができるかの技術のことを「談話のストラテジー」と呼ぶ。相手に自分の意図を了解させるためのメッセージの作り方、送り方の戦術である。どのような表現にするか、どのように表現を送るか、どのように相手の理解を促すかなどの工夫である。

先の妻が離婚を切り出す夫婦の会話では、妻が "But" で現状の逆転を相手に予想させ、"I thought" と過去形で現状の否定を暗示し、"We were happy." と過去形で過去の過ちの内容を述べる。と同時に、この過去形の文には、「現在は幸せでない」という過去と現状には大きなギャップがあるという意味が了解されている。そして、その結果、この現状の打開策として、「離婚」の提案が当然であるという互いの意図が明瞭に提示されている。現在形で "We are happy." (私達は幸せ) と単刀直入に語るのとは、全く反対の意図＝離婚が、"I thought we were happy." の過去形の文で表現され、相手に了解されるはずであることが発話者にはわかっている。この意図を読み取ることが、この会話の成功の鍵である。また、これに対して、"I did too." と極めて短い過去形の文で夫が「自分も勘違いしていた」と応答することが、相手の意図(＝離婚)をしっかり受け止め、相手の意図を了解した表現であることへの理解が重要である。この夫婦は、妻からのメッセージ「離婚したい」、夫からのメッセージ「離婚したい」を、互いに理解して、結局、相手の意図を正確に了解したのである。この夫婦の会話は、この後、二人の結婚生活は修復不能であることを語り、離婚の段取りの話に展開していく。そして、互いに激しく相手をなじる展開となる。

実例 4 感情を表現する発話

妻 I'll teach him a lesson he'll never forget! (アイツに思い知らせてやるわ)

夫 I'd rather burn the sofa than let her have it! (アイツにあのソファをやるくら

いなら燃す方がまだ)

そもそも会話の目的は、通常、相手に自分の意図を了解させることにある。そのための構文をどのようにするか、どのような語彙を使うか、できた文をどのように発音するかなどについても、結局は、自分の意図を相手に了解させる目的に照らして、最も効果的なものを選ぶ。だから、どのような文が良いかについても、表面上の文の形式だけでは語れな

い。重要なのは、「会話は相手に自分の意図を了解させるためにするものだ」という会話のねらいを自覚することであろう。

先にあげた「相手をなじる」会話の例においても、「自分は怒っている」という自分の意図を相手に見せるために行っているのである。この意図が、噛みあっている限り、会話は行われる意義がある。言葉を交わす意義がある。コミュニケーション活動が行われる意義がある。それがたとえ言い合い、ケンカであっても、意義がある。会話とは、発話者の意図を、受信者に了解させ、発話者の意図を実現させる活動なのである。

従って、発話者の意図が聞き手に無視される場合には、会話の成立は、しばしば困難に直面する。例えば、ダムの建設に反対する団体と、ダムの建設を推進する行政との間では、話し合いを持つ意図にズレがあるので、しばしばコミュニケーションは不調に終わる。コミュニケーションを成立させるためには、両者を共通の土俵に載せる特別の工夫が必要となる。一般的に言って、コミュニケーション活動には、発信者と受信者の状況と意図が予め分かっている、しかも、互いの意図が噛みあっていることが望ましい。

(4) 会話の環境に応じた発話づくり

ところで、メッセージを遣り取りする時の発信者と受信者の置かれている環境は、両者の会話の展開に影響する。例えば、日本国内にいるある男が、親の事故による急死を米国に滞在中の弟に電話で知らせる会話を想定する。発信者が電話をしようとしている環境と、受信者が電話を受ける環境には、かなりの開きがある。そのため、発信者からのメッセージが受信者に了解されるためには、その環境の開きを埋める工夫が必要になる。つまり、咄嗟に発信者が、父の死亡を語っても、受信者にはそのことを理解できないことが予想される。こんな場合には、発信者は、受信者が話の内容を理解できる状況になるまで、前置きとして、そこに至る経過をるる説明する必要がある。状況のギャップを埋めるために、一定の情報を提供したりして、受信者の側が、発信者のメッセージを送る状況を推測できるように、時間をかけて説明する必要がある。コミュニケーションを成功させるためには、発信者と受信者がメッセージを遣り取りする状況と環境を互いに見当がつく状態に整える配慮が重要である。

会話が行われる環境は、さまざまである。夫婦が寝室で語り合う環境、仕事仲間が仕事場で仕事の話をする環境、友人同士が道端でばったり出会って会話を交わす環境、学校の先生が受け持ちの生徒に生活指導をする環境等など、さまざまな環境がある。当然、それ

それぞれの会話の展開は、これらの環境に対応した展開でなければならない。環境に応じたコミュニケーション活動、会話を展開させることが大切である。

4. 英語会話での発話の工夫について

次に、コミュニケーション活動としての英語会話を通して、自分の意図を効果的に伝える要領について、具体的な例を見ながら検討してみよう。発話者の意図は、いつでも決まった構文の英文で伝えるわけではない。ある一つの意図を伝える場合にも、さまざまな構文の英文で表現されて、さまざまな要領で伝えられる。これらを環境や状況によって使い分ける能力が必要である。例えば、相手の状況に合わせた発話のタイミング、相手の理解能力に合わせた発話のスピード、相手の理解能力を考慮した使用語彙の選択、相手の好みを考慮したアクセント、相手の思考パターンを配慮したメッセージを送る順序、相手の対応の仕方に合わせたメッセージの区切り方の工夫などが必要である。

英語会話例1 意図の表現方法

次は、ある人が他人の家で話し込んでいる時、その人に帰宅を促す言い方である。この言い方には、次のように、ちょっと考えただけで、いくつかの言い方が考えられる。

I request you to come home. (帰宅するようお願いします)

Come home! (帰宅しろ)

Will you please come home? (帰宅してくれますか)

Isn't about time for you to come home? (そろそろ帰宅の時間と違いますか)

It's getting late. (遅くなりました)

このように、相手に帰宅を促す意図を伝えるには、要請文、命令文、疑問文、進行形の文など、さまざまな構文が可能である。だからと言ってこれらの構文は、「同じ意味の文」などと乱暴に扱ってはならない。それぞれの構文を、それぞれの環境と状況と意図と自分と相手の関係等に応じて、使い分ける必要がある。しかも、それぞれの文をどのようなタイミングで、どのような速さで、どのようなアクセントで、どのようなトーンで言うかは、その都度、工夫が必要である。これがまさにコミュニケーション活動に参加するものの仕事である。「要請の意図は、要請文で」と単純に決めつけてはならない。話し手と聞き手

とが置かれている状況や、あるいは、参加者の互いの関係に応じて、臨機応変な会話、言葉の遣り取りをすることが重要である。これがコミュニケーション活動の難しい点でもある。

英語会話例2 事実を脚色して述べる発話

次は、物語の発端＝事件が発生した状況を描写している文である。話し手は、徹頭徹尾客観的な姿勢を貫いている。そのため過去の事実を現在形ですべて語っている。

A policeman is walking along a London street at night. A man appears and passes the policeman. At the end of the street, the policeman turns and sees the man lying on the pavement. He has been stabbed in the chest. In his hand is a piece of paper which reads: "Sherlock Holmes 221B Baker Street." (夜中、警官が一人、ロンドンの通りを歩いている。男が一人現れて、その警官の傍を通り過ぎる。通りの突き当たりで、その警官は振り返る。先ほどの男が歩道に倒れている。胸をナイフで刺されている。手に「シャーロック・ホームズ 221Bベーカー通」と書かれた紙切れを持っている)

この例は、事件の発端の説明という「意図」のために、現実としては不合理な表現をしている例である。過去の出来事を現在形で、生き生きと説明する。

例えば、話し手がこの事件の現場を見渡せる建物の窓からこの場面を目撃して描写したとしよう。その時は夜中である。遠方から被害者の手に握られていた紙切れが見えるはずがない。紙切れの文字が読めるはずがない。にもかかわらず、この描写は実に自然。明瞭である。わかりやすい。なぜなら、この事件の描写が、シャーロック・ホームズの、これからの事件解決に不可欠な情報を提供しているからだ。つまり、この描写、語りは、実によくストーリーの状況をわきまえた、というよりは、計算し尽くされた描写となっているからだ。このように、聞き手にとって最も必要な情報、あるいは、最も興味のある情報を上手に提供することが、良い語りの条件である。リアルな姿勢で語っても、現実をありのままに語る必要はない。これが、語りのコツである。会話とは、必ずしも真実だけを現実のままに語る必要はない。

英語会話例3 事実を歪曲して述べる発話

次の例は、友人同士が通りでばったり出会って、相手が怪我をしている様子を見て取り、

二人の置かれている関係と状況を判断し、相手を気遣う言葉で始まり、怪我という不運な事故を明るく受け止め、明るい言葉で返す挨拶の会話である。相手に対する心配の気持ちと、気遣いに対する感謝の気持ちの表明とが、ユーモアたっぷりに表現され、底抜けに明るい陽気な挨拶の会話を構成している。

A How's it going? (元気かい) <どうしたの。怪我したの。相手に対する心配の表明>

B Great! (いいねえ) <大丈夫。相手の心配に対する感謝の気持ち。心配しないでの気持ちをユーモアで返す>

A Are those your crutches? (これ、あんたの松葉杖) <松葉杖を使っているじゃないか。怪我への心配>

B Marvellous, aren't they? (すごいだろう) <立派な松葉杖で嬉しい。相手の心配に対する感謝の気持ちをユーモアで返す>

A What about the neck brace? (首に着けているのはどうしたんだい) <首も怪我? むち打ちへの気遣い。心配の気持ちへの表明>

B Brand new! (新品さあ) <相手の気持ちに対する感謝の気持ちをユーモアで返す>

日常の挨拶の会話では、このように事実を描写するより、むしろ、心の動き、気持ちの表明、気遣いを重んじるため、事実を矮小化したり、大げさにして、ユーモアとか皮肉とかを込めて、会話にする工夫を加える場合が多い。事実をありのままに述べるというよりは、事実を利用して、自分の気持ちや相手に対する思いやりを述べることが多い。そのような場合には、むしろ会話は、作り話が頻繁に使われるものである。会話の創造的で、楽しい側面である。

とにかく、会話というものは、真実のみを語る必要はない。目の前にある現実や関係を言葉で語るわけだが、相手に自分の意図、気持ちや思いを理解してもらうことが目的である。そのためには、特別の工夫をする。上の会話で言えば、Aは、疑問形の文を通して怪我をした相手を心配する気持ちを表明し、Bは、怪我をしたが自分は元気だから心配しないでくれということを、ユーモアたっぷりに返答している。Bは、表面上は、事実ではない張ったりをしているようであるが、相手を思いやる気持ちが感じられて、なかなか良くできた会話である。事実を語らないが上手くできた会話例である。

英語会話例4 不足する情報を添加する発話

会話を始める場合、会話の目的を自覚する必要がある。次の会話は、まず、ワトソンが新聞記事を読むという行為を通して、シャーロック・ホームズ（読者）に、新しい情報を提供し、その情報を元に、二人で意見を交わす会話である。

WATSON (reading the newspaper)(新聞を読みながら) "...the case that got away."
"Ridiculous... Nonsense..." there was a knife in his back, and a note on which was written, "Sherlock Holmes: 221B Baker Street." Holmes, have you read this article? (変な事件だ。変だなあ。わかんない。背中をナイフで刺されている。手にはメモ書き＝「ベーカー通、221B シャーロック・ホームズ」を持っているなんて。ホームズ、この記事を読んだかい?)

HOLMES Yes. (読んだとも)

WATSON I think it's insulting. (僕は恨みだと思うよ)

HOLMES I think it's true. (僕もそう思う)

WATSON True? (そうだろうか?)

このように、相手がこちらの意図を理解するために状況の説明や会話の元になる情報が不足している場合には、会話を始める前に、上の例のように、会話のための予備的情報を予め補っておいてから、会話を開始する場合がある。相手の状況をわきまえて会話に参加する手法の一つである。

また、会話は、もちろん、二人のみで行われるとは限らない。二人以上、複数のものが、適宜に参加して行われる。が、通常、複数のものが、同時に話すことはない。順序には決まりはないが、適宜順番に発言する。会話が起る状況の中で、会話が進行するに相応しい役割を、司会者が指名するでもなく、参加者が瞬時に暗黙のうちに理解して、自分に相応しい役割を果たすべく努力する。しかも、通常、会話は自発的に展開される。だから、良い会話が実現されるためには、会話に参加する一人一人が、会話が行われる状況の中で、自分の果たす役割を自覚することが大切である。会話の参加者には、会話の参加者の中で、自分に最も相応しい役割を、瞬時に読み取って、会話に参加することが期待されている。

英語会話例 5 自分の役割を自覚した発話

次は、警部のレストラーデ、探偵のワトソン、シャーロック・ホームズの三人が、自分の立場、役割を十分にわきまえて、会話に参加している例である。

LESTRADE Morning, Dr Watson.(おはよう。ワトソン博士)

WATSON Inspector Lestrade. Come in. Come in.(レストラーデ警部、いらっしゃい)

LESTRADE Thank you. Morning. Holmes.(やあ、どうも。おはよう。ホームズさん)

HOLMES Hello, Lestrade. How are you?(やあ、レストラーデ警部、元気かい)

LESTRADE Never better. Beautiful morning. Just look at it.(元気どころじゃないね。天気はいいがね。これをちょっと見てくださいよ)

WATSON Care for some coffee?(コーヒーでいいかい)

LESTRADE Oh, no thank you, Doctor. You know, a day like this makes me feel... makes me feel... I feel awful.(いや、いらぬ。博士。こういう日は、気分が悪くてね。本当に嫌だね。ひどいよ)

WATSON what's wrong?(どうかしたかい)

LESTRADE (pointing to the newspaper)(新聞を指さしながら) That's what's wrong!(どうかしてるとはコイツのこった!)

WATSON The article.(そりや新聞記事だね)

LESTRADE The corpse.(死体だよ)

WATSON You don't know who he is.(死体が誰かわからないんだね)

HOLMES He does know who he is.(レストラーデ警部は、死体が誰かはわかっているさ)

LESTRADE How do you know I know who he is?(死体が誰かを、私が知っていると、どうして、君にはわかるのだ?)

WATSON Do you?(君は知っている?)

LESTRADE Yes.(知っているとも)

WATSON.(to Holmes)(ホームズに向かって) How did you know?(君はどうしてそれがわかったの?)

HOLMES An unidentified corpse is annoying, but not distressing. Lestrade is distressed.(死体が誰かわからないのは厄介だけれども、困ることじゃない。レストラーデ警部は、困っているが)

LESTRADE I am not. (わしゃ、困っちゃいないさ)

WATSON Yes, you are. You know who the murder man is. (いや、困ってるんだろ。殺したヤツが誰かをあんたは知っているんだからなぁ)

LESTRADE I know who the killer is! (わしゃ、殺したヤツを知っているんだ!)

WATSON You do? (知ってる?)

LESTRADE Yes. (知っているとも)

WATSON Well, then what's your problem? (じゃ、困っているのは何だ?)

HOLMES He doesn't know how the killer did it. (レストラーデ警部は、犯人がどうやって殺したか、その殺し方がわかんないのよ)

WATSON Well, the paper said that he was stabbed. (えーと、新聞にはナイフで刺されたと書いてあるよ)

HOLMES What's the killer's name, Lestrade? (レストラーデ警部、殺したヤツの名前は?)

LESTRADE Harry Rigby. (ハリー・リグビーだ)

HOLMES Hary Rigby. He robbed a bank three years ago. He's in prison. (ハリー・リグビー。ヤツは3年前に銀行強盗をやって、今は刑務所だ)

LESTRADE He got out yesterday. (ソイツが昨日出所したんだ)

HOLMES You never found the money or his accomplices. (警察は、まだ、その時の盗品の金とか共犯者を発見してないってわけだ)

LESTRADE True. (その通り)

HOLMES So from the the moment he stepped out of jail, your men have been watching him. (そんなら、ヤツが刑務所から出所した瞬間から、あんたの部下がずっと見張っているんだろ)

LESTRADE Fifteen of them. My best men. (15人の部下がね。最も優秀なヤツラさ)

WATSON And you are his alibi. (それじゃ、警察がヤツのアリバイになっちゃっているってわけだ)

HOLMES Where is Rigby now, Inspector. (リグビーは、今、どこにいる、警部)

LESTRADE Rooms in Battersea. (バターシーの部屋だ)

WATSON And your men are still watching him. (当然、君の部下は今でも見張っているんだらうね)

LESTRADE Every second. Holmes, I was wondering if you'd come along and take a look at the place, and tell me how Rigby's getting out and back in again without my men seeing him. Would you do that for me, Holmes? (一瞬の隙もなく。ホームズさん、私と一緒に来てちょっとその場所を見てくれませんか。リグビーがどうやってわしの部下の目をごまかして、そこを抜け出し、また、そこに戻ったかを、教えてくださいませんか。ホームズさん、お願いします)

HOLMES Lestrade, you couldn't keep me away. (どうしても私でないとダメかね、レストラーデ警部)

もちろん、この会話は、作者によって仕組まれた、いわば、計算し尽くされた会話である。現実には、各自が自分の役割をこのようにバランスよく心得て会話に参加することは滅多にない。しかし、われわれの現実の会話においても、できるだけ自分の役割を自覚して、バランスよく会話に参加するよう心がけたいものである。

英語会話例 6 会話への参加を渋る発話

一方、現実の会話においては、参加者がいつも積極的で、協力的であるとは限らない。次のように、Bが、Aの会話に巻き込まれるのを避けようとする場合がしばしば見られる。これも会話の一つの型であろう。

A Jane's been strange lately. (最近、ジェーンはおかしんだ)

B Oh, yeah? (そう?)

A She's been acting sort of funny. (様子がどうもへんなんだ)

B Hmmm. (ふーん)

A Makes one wonder. (変だよなあ)

こういう返事の仕方では、話は続かない。会話は、いずれ沈黙し、途切れる。しかし、これもBの意図である。Aはこの結果を厳粛に受け止めなければならない。このようにして会話が途切れることは日常よくあること、失敗例ではない。Bが自分の意思を貫徹したまでのこと。会話を中止に持ち込む時に、日常よく使う常套手段である。

英語会話例7 取り留めの無い発話

次は、あるレストランで、食事をしたグループが、食事が終わって、支払いの段階で、"Twenty-two dollars each." (各自22ドルずつお願いします)と請求されて、それぞれが、勝手勝手に取り留めの無い不平を言う会話である。隣の人との勝手気儘な遣り取りであるが、必ずしも受け答えは必要としない。

- A I didn't eat the garlic bread. (僕はガーリックパンは食べなかった)
- B But you had the mineral water. (でも君はミネラルウォーターを飲んだじゃないか)
- C I didn't have a first course. (私は最初に出た料理は食べなかった)
- D You had some of my pancakes. (あなたは私のパンケーキをつまんだじゃない)
- C I certainly didn't order it. (私は絶対にそれは注文しなかった)

このような会話は、各自が不平を表明しているに過ぎない。なんらかの情報を求めているわけでもなし、特別な行為を誰かに要求しているわけでもない。言ってみれば、発言者が自分の不平を発散しているのであって、ガス抜きでしかない。従って、Aに対するB、Cに対するDが、いちいちピントの外れた遣り取りをしても問題はない。ただし、それぞれに好きなことを言わせる機会を与えなければならない。それぞれが口々に愚痴って、一渡り愚痴が終われば、結局は、全員、22ドルを支払うのである。日常の中には、このように、単に発話者が感情を吐露するだけで完了する取り留めの無い会話も多い。それはそれでまとまりが無くとも問題はない。

英語会話例8 相手に気遣いを示す発話

次は、自分の足を他人に踏まれ、踏まれた人が、踏んでいる人にクレームをつける発言である。相手にクレームをつける言い方はなかなか難しい。2つの極端な言い方を見てみる。第一の言い方は、相手に直接に怒りをぶつける言い方。第二の言い方は、実にまわりくどく遠まわしに皮肉を込めて言う言い方。相手によって使い分ける必要がある。発話者の性格を表すことにもなる。いずれにしても工夫が必要である。

第一の例 Get off my bloody foot! (私の足を踏むな!)

第二の例 I'm sorry to bother you and I hope I'm not too trouble but could you move

your foot a little either way because somehow mine seems to have got caught under yours. (ちょっとごめんなさい。ご迷惑にならなければいいのだが、お足をちょっとどちらかに動かしていただけますか、どうも私の足があなたの足の下にあるらしいのです)

この会話は、足を踏んでいる相手に、踏んでいる足をどけるよう相手に一定の行為を要求する言い方である。なんらかの行為を他人に要求する言い方は、難しい場合が多い。気を使うものである。が、どの程度、どのように気を使うかは、発話者の人柄で決まる場合が多い。発話者の自覚の程度による。通常は、上記のような極端な言い方の間で、さまざまなバリエーションのある表現が工夫される。そして、その成否の結果は、話す側の話し方、聞き手の受け取り方によって決まる。よい発話の作り方の公式はない。自分の人柄に応じた工夫が必要である。会話とは、その人その人の人柄に基づいてなされるものだ。

英語会話例 9 相手の意図を心得た簡潔な発話

次の会話は、互いに信頼しあっている恋人同士の会話である。A、Bの間で、これからどうするか相談する会話である。二人の親しい関係から、いちいち語らずとも、互いに相手の意図を知り尽くしているので、会話は実に簡潔である。

A What shall we do? (どうする?)

B Up to you. (あなたに任せるわ)

A A drive? (ドライブ?)

B I don't mind. (いいわ)

A Where to? (どこにする?)

B I'm easy. (どこだっていい)

このような親しい二人の間柄では、互いに置かれている状況を既に互いに理解していて、それぞれの意図も分かりあっているので、状況や意図について、特に説明を要しない。互いに相手の意図をずばり確認するだけの簡潔な遣り取りだけで十分だ。このような会話は、例えば、夫婦、兄弟、親子、親友、同僚間のような親しい間柄で行われる。一般的に言って、遣り取りは簡潔である。

英語会話例10 外部の動きを気にする発話

次は、AがBを、電話でパーティに誘う遣り取りである。パーティには、通例、夫婦が揃って参加する社会では、このような誘いがあったとき、Bは返事をする前に連れ合いの奥さんの反応を見るのが通例である。そのために、A、Bの会話の中断が余儀なくされる例である。

A What are you doing next Saturday? (今度の土曜日のご予定は)

B I'm not sure. (特にありません)

A Would you like to come to a party? (パーティはいかがですか)

B Wait till I ask Fiona. (フィオナに聞いてみるから待って)

このような場合、Aは、Bの気懸りな問題をすぐに推測して、その問題を解決するためのチャンスをBに与え、協力する姿勢が大切となる。良い会話では、相手の心の動きを即座に読み取って、それに適切に対応することが重要である。

英語会話例11 相手を咎める発話

次は、土曜日の夜のパーティに誘われた夫が妻に都合を尋ねたら、妻がパーティに行くのに反対して、会話が険悪になった例である。

We were invited to a Saturday party. (土曜日にパーティに誘われたんだ)

What did you do that for? (いったいどういうつもり?)

What's that? (何か困る?)

Saturday was going to be my quiet night. (土曜日の夜は静かに家にいるはずだったでしょ)

I just thought... (僕は、その・・・)

Well, you can go on your own. (じゃ、あんただけで勝手に行けば)

このように、会話の相手が急に不機嫌になるときもある。いつも上機嫌で協力的な状態であるとは限らない。会話というものは、いろいろな状態の相手と対応する必要がある。いつも楽しく愉快的な状態になる保障はない。また、そうする必要もない。場合によっては

相手と話す必要がない時もある。その時は会話を開始しないことだ。途中からでも、無駄だと思ったら、中断してもよい。要するに、良い会話は、自分の意図や気持ちに忠実であることだ。相手の意図や気持ちを了解することだ。従って、互いに心の状態を読むこと、自分の気持ちに忠実に行動することが何よりも重要である。コミュニケーションとは、そうしたものであろう。

会話に参加するものがいつでも積極的で、協力的で、調子を合わせてくれるとは限らない。そのような場合には、それなりに、妥協点を探して、会話を展開するしかない。最悪の場合は、会話は途切れる。中断もする。それもまた成り行きである。会話は、多くを語るが良いわけではない。沈黙も、また、会話である。会話に参加したくなければ、参加を取りやめてもよい。会話の進行を妨害することだってある。いずれにしても、会話は、発話者一人のものではなく、会話に参加する人たちみんなの協同作品なのである。

5. まとめ 英語会話のコツ

コミュニケーションの参加者は、まず、コミュニケーションの仕組みを、よく知っている必要がある。その仕組みの中で、参加者が置かれている状況や環境を配慮し、その状況や環境に応じたコミュニケーションの手段や方法を選択し、効果的なコミュニケーションが行われるよう、不断の工夫と努力と知恵を働かせることである。

メッセージは、発信者が自分の意図を正確に表現するだけでなく、受信者の側からみても理解しやすいものにつくられるべきである。すなわち、メッセージの内容は、コミュニケーションに相応しいものにし、発信者の側から見ても常識的であることは当然であるが、受信者の側から見ても、受信者の常識の範囲内にあり、受信者がすぐに了解できるものにすべきである。

発信者は、自分が発したメッセージが、最小の誤解で受信者に正確に了解されるよう努力しなければならない。そのためには、受信者がメッセージを受け取る時の心の準備状態はどうか、受信者がおかれている状況や環境はどうか、あるいは、そのメッセージを理解する能力の程度はどうかについて、予め知っていて、それらに合わせたメッセージを作って、送ることが望ましい。メッセージは、曲解されてはならない。受信者は、発信者がメッセージを送る意図、メッセージを送る状況や環境について、可能な限り推測し、発信者のメッセージを送る気持ちを配慮し、メッセージを正確に了解するよう全力をあげるべきである。

従って、英語で会話をする場合は、いわゆる、「談話のストラテジー」を駆使すべきである。すなわち、発信者は、会話が行われる状況、環境、会話の目的、会話の中での自分と相手の役割などをあらゆる機会に考慮し、発信者の意図が正確に聞き手に了解されるよう全力をあげるべきである。

英語会話では、次のようなさまざまな工夫と努力が臨機応変になされるべきである。

- (1) 話し手は、聞き手が、どのような状況、環境、意図、目的、理解能力で自分の話を受取るかを予め予測し、それらに応じた発言をする。
- (2) 聞き手は、話し手が、どのような状況、環境、意図、目的、発言能力で自分に語りかけているかを考慮し、それに基づいて発話を了解する。
- (3) 話し手は、自分の発言が、聞き手に了解されやすくするために、内容、形式、発言の順序、方法、発言のスピード等について工夫をする。
- (4) 聞き手は、発言されたものを正しく了解すめために、発信者の置かれている状況、環境、発言の意図、目的、発信者の発話能力などを考慮して、それらの知識に基づいて、一定の補足、修正を加えて了解する。

結局、会話は、話し手の意図を過不足なく正確に聞き手に伝えるものであるから、発言は、現実をありのままに語る必要はない。聞き手も、語られたものを文字通りに受取るものでもない。多くの場合、話し手の発話の目的や、発言の態度や状況、環境等を考慮して、聞き手が、聞き手の能力に応じて、メッセージを補ったり、削除したりして、一定の補足、修正を加えて了解しているものである。また、会話には、発話者が、感情を吐露するだけのものもある。従って、会話では、話し手も聞き手も互いに相手の心の動きを読み取る努力が大切である。良い会話は、話し手は自分の意図や気持ちを言葉で忠実にしかも十分に表現する一方、聞き手は、言葉になっていない諸々の情報も加え、相手の心の動きを的確に読んで、相手の意図や気持ちを過不足なく正確に了解することが大切である。会話は、発話者が一人で創るものではない。会話に参加する人たち全員の総力で創られる協同作品である。

注 この小論で使われている会話例は、次の2作品から引用した。

- (1) "In the Case of Harry Rigby" in *English by Video, Videoscript of Sherlock Holmes and Dr Watson*. Longman.
- (2) Robert Treborlang. 1987. *How to be Normal in Australia*. Major Mitchell Press.

参 考 文 献

- Abbs, B. et al. 1975. *Strategies*. Longman.
- Allen, J. and H. Widdowson. 1974. "Teaching the communicative use of English." *IRAL*. 12. 1-12.
- Austin, J.L. 1962. *How to do things with Word*. Cambridge, Mass: Harvard University Press.
- Baxter, J. 1980. "Interactive Listening" in *TESOL Reporter*, Fall 1980.
- Bialystok, E. 1990. *Communication Strategies*. Blackwell.
- Brown, G. 1973. *Listening to spoken English*. London: Longman.
- Brown, G. "Understanding spoken English" in *TESOL Quarterly* 12,3:271-283.
- Brumfit, C.J. and K.Johnson (eds.) 1979. *The Communicative Approach to Language Teaching*. O.U.P.
- Catford, J.C. 1950. "Intelligibility" in *English Language Teaching*, 1:7-15
- Cherry, C. 1957. *On human communication*. Cambridge, Mass.: MIT Press.
- Clyne, M.1979. "Communicative Competence in Contact" in *I.T.L. Tijdschrift von Tolgepaste Linguistick*, Vol.43.
- Clyne, M. 1981. "Culture and Discourse Structure" in *Journal of Pragmatics*, 5.
- Elizinga, R.H. 1978. "Temporal organization of conversation" in *Sociolinguistics Newsletter*, 9(2): 29-31.
- Fry, D. 1970. "Speech reception and perception" in J.Lyons (ed.), *New Horizons in linguistics*.
- Grice, H.P. 1975. "Logic and conversation" in P. Cole and J. L.Morgan(eds.), *Syntax and Semantics, Vol.3, Speech Acts*. New York: Academic Press.
- 橋内武 1999 『ディスコース 談話の織り成す世界』 くろしお出版
- Hymes, D. 1972. "On communicative competence." in J. B. Pride and J. Holmes (eds.) *Sociolinguistics*. 269-93. Harmondsworth: Penguin.
- Johnson, K. and K. Morrow (eds.) 1981. *Communication in the Classroom*. London: Longman.
- Kameen, Patrick T. 1979. "Review of listening in the real world" in *TESOL Quarterly*, 13(1):113-115.

- Kikoski, John F. 1980. "Communication: understanding it, improving it" in *Personnel Journal*, 2:126-131.
- Kitao, K., Kitao, K.S., Miller J.H., Carpenter, J.W., Rinnert, C. 1995. *Culture and Communication*.
- Labov, W. 1966. *The Social Stratification of English in New York City*. Washington, D.C. : Center for Applied Linguistics.
- Labov, W. 1972a. *Language in Inner City*. Philadelphia:University of Pennsylvania Press.
- Labov, W. 1972b. *Sociolinguistic Patterns*. Philadelphia:University of Pennsylvania Press.
- Larry, E. Smith and Khalilullah Rafiqzad. 1979. "English for Cross-Cultural Communication, The Question of Intelligibility" in *TESOL Quarterly*, Vol.13, No.3, September.
- Littlewood, W. 1981. *Communicative Language Teaching*. C.U.P.
- Littlewood, W. 1992. *Teaching Oral Communication*. Blackwell.
- Randsepp, E. 1979. "The art of listening" in *Supervision*, 41(11):14-16.
- Rivers, W. M. 1983. *Communicating Naturally in a Second Language*. Cambridge Univ. Press.
- Rost, M. A. and Stratton, R. K. 1978. *Listening in the real world:clue to English conversation*. Tempe, Arisona: Lingua House Publishing Co.
- 佐野、水落、鈴木 1995 『異文化理解のストラテジー 50の文化的トピックを視点に』東京 大修館書店
- Savignon, S. J. 1983. *Communicative Competence: Theory and Classroom Practice*. Reading, Mass: Addison-Wesley.
- Searle, J. R. 1969. *Speech Acts. An essay in the philosophy of language*. C.U.P.
- Thomas, I. 1978. *Communication Activities for Language Learning*. Wellington: Victoria University, English Language Institute.
- 渡部昇一 (編) 1983 『英語コミュニケーション論』 東京 大修館書店
- Widdowson, H. G. 1976. "The significance of simplification" in *Colloque; The notion of simplification*. Universite de Neuchatel.
- Widdowson, H.G. 1978. *Teaching Language as Communication*. O.U.P.

ABSTRACT

How to Communicate in English

The Strategies of English Conversation

Shogo KASHIWASE

The present paper deals with the strategies of English communication; how to make a good English conversation. Those who are involved in an English conversation should understand the system of conversation; what the speaker should do, what the message must be and what the listener should do. Thus the conversation should be done so that the speaker's intention is understood accurately and properly, neither overly nor diminishedly, by the listener. To realize the purpose,

- (1) the speaker should consider the listener's situation, environment, intention, aim and understanding ability in advance of speaking and speak appropriately according to the characters of the listener.
- (2) the listener should also consider the speaker's situation, environment, intention, speaking aim and ability, and understand the received speech accurately and properly according to the characters of the speaker.
- (3) the speaker should make the message appropriately in the frame of the listener's sense of the sentence structure, vocabulary, grammar, length, arrangement, order, and send them in the proper way of the listener's ability, speed and breath timing of the pronunciation in order that the message is understood correctly and accurately by the listener.
- (4) the listener should complete and modify the listened speech on the knowledge of the speaker's situation, environment, attitude, speaking ability in order that the speaker's intention is understood accurately and properly by the listener.

(2000年6月1日受理)